

八木秋子著作集



著作集 完結

八木秋子さんが、すでに遠い五十年ほど前、書かれたクロンシュタットの反乱も、マフノのウクライナ・コミューンも発表当時私は全く読み、また、私自身もそれらについて書いたので、忘失しがたい名になったけれども、八木さん自身については何ら知らなかつたところ、今度、個人通信を読むと、八木さんは、それらの文章を書かれるずつと前から酔い自足の道をひたすら歩みつけ、そして、現在にいたつてゐることを知つた。それは極度の困難の持続の道であつたけれども、しかも、その困難こそ自立の場にはかならぬと長く長く立証しつづけたことに、八木さんの本質的な先駆性が存する。

壇谷 雄高

- | | | |
|---|------------------------|-----|
| 八木秋子略年譜 | 一九三二年(昭和7年) | 37歳 |
| 1月 資金獲得事件に関して逮捕 | 6月 保釈 | |
| 一九三五年(昭和10年) | 40歳 | |
| 1月 「農村青年社」運動に関し逮捕され | 長野へ移送。治安維持法違反で2年6ヶ月入獄。 | |
| 一九三八年(昭和13年) | 43歳 | |
| 4月 出所。渡満。満鉄新京支社留守宅相談所勤務。 | | |
| 一九四五年(昭和20年) | 50歳 | |
| 11月 満州より引揚げる。 | | |
| 一九四八年(昭和23年) | 53歳 | |
| 木曾より上京し、ニコヨン生活を経た後、戦災者、引き揚げ者、浮浪者を収容する母子寮に勤務。 | | |
| 一九六二年(昭和37年) | 67歳 | |
| 母子寮の整理により退職、翌年帰郷 | | |
| 一九六七年(昭和42年) | 73歳 | |
| 上京し清瀬で一人住む。 | | |
| 一九七六年(昭和51年) | 81歳 | |
| 12月 都立養育院に入寮 | | |
| 一九七七年(昭和52年) | 82歳 | |
| 7月 八木秋子通信「あるはなく」を発行 | | |
| 一九七八年(昭和53年) | 83歳 | |
| 4月 八木秋子著作集I「近代の(負)を背負う女」発刊 | | |
| 12月 八木秋子著作集II「夢の落葉を」発刊 | | |
| 一九八一年(昭和56年) | | |
| 5月 八木秋子著作集III発刊 | | |
| 一九三二年(明治28年) | | |
| 9月6日 長野県西筑摩郡福島町(現木曾福島町)にて出生。 | | |
| 一九一八年(大正7年) | 23歳 | |
| 1月 結婚、翌年長男誕生 | | |
| 一九二二年(大正11年) | 27歳 | |
| 2月 家を捨て離婚、有島武郎・小川未明らと親交。木曾にて小学校の教師をする。 | | |
| 一九二四年(大正13年) | 29歳 | |
| 冬 上京、東京日々新聞に入社。社会運動に関心。 | | |
| 一九二八年(昭和3年) | 33歳 | |
| 7月 「女人芸術」の編集に参加、同時に誌上に小説・評論を発表。アナキズムを明確にする。 | | |
| 一九二九年(昭和4年) | 34歳 | |
| 7月 藤森成吉への公開状を発表。林芙美子と九州講演会の旅へ。 | | |
| 一九三〇年(昭和5年) | 35歳 | |
| 3月 高群逸枝・住井すゑらと「婦人戦線」を創刊。マフノ農民運動の小説「ウクライナ・コミューン」を発表。 | | |
| 一九三二年(昭和6年) | 36歳 | |
| 2月 宮崎晃、星野準一らと「農村青年社」を結成。長野県を中心に講演、情宣活動をする。 | | |

編集 八木秋子個人通信「あるはなく」
〒187 東京都小平市花小金井南3-929 相宗範昭
郵便振替口座 相宗範昭 東京4-40972

八木秋子著作集は個人通信の一環として計画され発行されている。一応第III集でもって終止符を打つ。通信は3ヶ月に一回出されている。あわせて御購読をお願いしたい。名号とも150円(送料含む)

発行 株式会社 JCA出版
東京都千代田区神田神保町1-42 日東ビル2F
〒101 電話 03(292)0401

著作集 I

78年4月刊

近代のへ負くを背負う女

一三〇〇円

離婚後、一層自立への道を、確かさを持って歩み始める。婦女の権利の主張を男性に、社会に、そして女性自らに鋭く叫ぶ。「種時く人」「女人芸術」「婦人戦線」「黒色戦線」に寄稿した評論・小説を集大成。

「婦人の解放」「公開状―藤森成吉氏へ」「一九二二年の婦人労働祭」「ウクライナ・コムニオン」「日本資本主義の鳥獣」「明か
るい肯定の人―高群逸枝」

A5判別頁 9ホ2段組

著作集 II

78年12月刊

夢の落葉を

一八〇〇円

引き揚げ者や浮浪者などの母子寮の寮田の生活を送り、戦後日本社会の虚構をしつと見据えてきた。そして、自らをふり返り、ふるさと・木曾の風俗と幼年期の思い出を様々な想いを込めて綴る。

A5判336頁 10ホ一段組

著作集 III

81年5月刊

異境への往還から

二〇〇〇円

戦後執筆した作品と著者のノートより妙出した評論等。日々の姿勢と命を生き抜くその肉声は著者の思想そのものであり、また我々に真の意味で自立ということを教示する。

「満州最後の日」「満州引き揚げ記」「定時制レポート」「誰れも知らない―母子寮―の記録から」「日記―著作目録、秋子の生涯―

A5判288頁



母子寮 寮田時代
(1950年代前半)



農村青年社運動 時代
(一九三〇年代前半)

熱い注目と反響

■朝日新聞

戦前の女性誌に筆陣をつらねた高群逸枝と八木秋子。一人は三十年間の女性史研究に自己を閉じこめ、古きものの探求によって未来を啓示した。一人は実践の場へと自己を駆り、過去いつさいを果敢に振り捨てつつ生きぬいた。逸枝の業績は偉大だが、秋子が身をもって描いた鮮烈な軌跡もまた、心を魅(ひ)きつけてやまない。
(堀場清子氏)

■共同通信

「生きるかぎり闘う良心から身もこころも離さない、しかも自由人でありたい」と、ひたむきに生きてきた彼女の肉体をくぐって生まれた言葉には、真の思想といえるものがある。知識の再構成ではない、人間そのものをあらわにする言葉がある。
(堀場清子氏)

■思想の科学

八木秋子が屹立するゆえんは、彼女がつねに迷わずたじろがず生きたということではない。悩み苦しみ、迷いたじろぎ、しかし最後の土壇場において、つねに自己をあくまで主体的人間として立たしめるところに八木秋子の真価がある。
(加納実紀代氏)

■図書新聞

近代日本における女性アナキスト五人をあげるとなれば、明治に管野すががあり、大正には伊藤野枝、金子文子があった。昭和になつて光るのは高群逸枝、そして五番めに私は八木秋子をあげたいが秋子は前の四人ほど世間に知られていない。知られていないが、その思想の熱度と動きの熾烈さは四人に優るとも劣らない。
(江刺昭子氏)

■週刊ポスト

この魅力のある女性の生き方を知るには、続巻として通信「あるはなく」を読まねばならない。社会の底辺に生きる人々を書き、人間の自由と解放を求めてやまない一人の女性の一生をそこに思い出すだろう。
(北沢洋子氏)

他に東京新聞、婦人民主新聞に掲載。

共同通信は中国、徳島、愛媛、信濃、田口、岐阜、白河、北海、北海道に掲載。